



主体的学習態度をはぐくむ教育方法：
助産学演習における少人数グループワークの試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 光子, 井端, 美奈子, 町浦, 美智子, 古山, 美穂, 工藤, 里香, 森川, 香織, 末原, 紀美代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010781

報 告

主体的学習態度をはぐくむ教育方法
—助産学演習における少人数グループワークの試み—

大平 光子・井端美奈子・町浦美智子

古山 美穂・工藤 里香・森川 香織・末原紀美代

A Method of Promoting the Attitude Towards Independent Learning: An Experiment of
small group work in Midwifery Education

Mitsuko OHIRA, Minako IBATA, Michiko MACHIURA
Miho FURUYAMA, Rika KUDO, Kaori MORIKAWA, Kimiyo SUEHARA

Key words: Midwifery education, small group work, tutorial, case study

緒 言

平成4年の看護師等の人材確保の促進に関する法律に基づく施策の実施以降、すさまじいスピードで学士課程が増設された。わが国の看護職者の育成においては、学士課程の入学定員が看護師養成の1割を占めるようになった。学士課程の増加に比例して社会からの看護への期待は高まり、学士課程における看護学教育では社会的ニーズの変化に対応しうる、質の高い、より特徴のある教育を行う必要が高まっている。

平成13年度に発足した「看護学教育の在り方に関する検討会」では、日本看護系大学協議会の看護実践能力検討委員会と連携しながら、看護学士課程の特色、卒業時点までに到達すべき看護実践能力の到達目標、到達目標達成度の評価方法が検討されている最中である。

看護の臨床場面では、その場その場で即座の判断が求められる。また、質の高い効果的な看護援助を行うためには、常に主体的に学習し、問題解決能力が発揮されなければならない。主体的学習や問題解決能力の育成に関しては、従来からグループ学習や事例演習が行われている。最近では主体的学習態度や学生の判断力を高める学習方法として、テュートリアル教育や

PBL (Problem based learning) が看護教育においても注目されている^{1) 2)}。助産選択科目においては、助産診断能力の強化を目的とした小グループによる事例学習³⁾への取り組み、学習者主体の自己学習を促進するPBL (Problem based learning) の成果⁴⁾が報告されている。

著者らはこのような現状の中で、学士課程において助産教育を行う立場から、妊娠、分娩経過を具体的にイメージしながら、学生の思考に広がりや深まりをもたらすような助産診断実践過程の展開を試みている。本稿では平成15年度から開始した助産診断技術学Ⅱにおける小人数グループワークによる学習方法を導入したプロセスと今後の課題について報告する。

1. 小人数グループワークによる学習方法
導入の経緯

①科目の位置づけ

助産診断技術学Ⅱは、学士課程において助産学を学ぶ一連の選択科目の1つである。関連科目および学年進行は、表1に示す通りである(表1)。

助産診断技術学Ⅱは3単位90時間で、春と夏の2回にわたる集中講義である。平成15年度は

表1 大阪府立看護大学看護学部における助産科目とその概要（読み替え科目は除く）

科目名（選択制限の有無） 単位(時間) 年次	科目の概要
基礎助産学 選択(制限なし) 1単位(15) 3年後期	助産の概念、助産の歴史、母子保健の動向、助産の教育・研究の動向、倫理的問題、医療事故
助産診断技術学Ⅰ 選択(制限なし) 1単位(30) 3年後期	助産診断過程、基本となる助産技術、妊娠期の助産診断実践過程(事例演習) 妊婦外来・マタニティスクール(臨地での演習) 健康教育(学内演習)
助産診断技術学Ⅱ 選択(制限あり) 3単位(90) 4年前期 集中講義(4月, 8月)	助産診断技術 産婦の安全・安楽な分娩の援助、褥婦の健康生活への援助 新生児の正常な適応過程への援助 ハイリスク妊婦の援助、正常経過からの逸脱の診断と援助
助産管理 選択(制限あり) 1単位(15) 4年前期 集中講義(4月)	助産管理の概念、特性 病院における助産管理業務、助産所の管理 助産所見学
助産学実習 選択(制限あり) 7単位(315) 4年後期 実習: 9-10月	分娩期および産褥・新生児期の助産診断実践過程 妊娠期の助産診断実践過程 助産所実習

表2 助産診断技術学Ⅱの学習目的および学習目標

<p>【学習目的】 周産期における助産過程の展開に必要な診断・技術の原理や技法の基礎を学び、演習を通して助産の実践に結びつけることができる。</p> <p>【学習目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分娩期の助産診断に必要な診断の原理と診断の方法を理解できる。 2. 分娩期の援助に必要な基本的な助産技術を習得できる。 3. 分娩期の事例に基づき産婦およびその家族に応じた助産診断実践過程を理解できる。 4. ハイリスク状態にある妊婦・産婦・褥婦・新生児の援助に必要な助産診断技術が理解できる。
--

春48時間と夏42時間、平成16年度は春52時間と夏38時間に配分して展開した。

②学習目的

助産診断技術学Ⅱの学習目的は、「周産期における助産過程の展開に必要な診断・技術の原理や技法の基礎を学び、演習を通して実践に結びつけることができる。」である。

③学習目標

助産診断技術学Ⅱの科目全体の学習目標は表2に示す通りである(表2)。分娩は正常分娩であっても、同じ分娩経過をたどるものではない。したがって、分娩期の助産診断実践過程では産婦に寄り添ってケアを行いながら、自ら主体的に情報収集、アセスメントを行い、理論的根拠

を踏まえて、診断、実践する能力を習得することが求められる。

④従来の紙上事例演習における課題

看護学生にとっては、分娩に関することは他の看護場面以上に非日常的なものである。したがって、事象を理解すること、助産診断実践過程を展開することは難しい。従来の紙上事例演習では、実際の助産場面における刻々と変化する分娩期を具体的にイメージしながら、学生の思考に広がりを持たせるような展開には限界があった。

そこで、紙上事例演習の展開において、チュートリアル教育の一つであるPBLで用いられる方法⁵⁾を取り入れることとした。具体的には、

事例のシナリオを複数の場面に分け、時間経過に沿って随時提示していくという方法である。この方法でシナリオを提示すると、学生は時間経過にそってアセスメントと推論を進めていくので、次の場面を提示されたとき、その前の場面で、アセスメントしたこと、推論したことの結果を得ることになる。したがって、従来の紙上事例にはなかった臨場感を持たせることができる。

2. 助産学演習における少人数グループワークの実施過程

①少人数グループワークのねらいについての教員間のコンセンサス

少人数グループワークは平成15年4月から開始した。生活体験や人と関わりが希薄になっている学生が短期間の助産学実習において診断能力や実践力を身につけるためには、演習期間の工夫が必要であることは以前からコンセンサスを得ていた。このことに加えて、分娩期の助産診断実践をリアルに捉え、学生が主体的かつ批判的な学習態度を身につけるためには学生を少人数グループに分け、1グループに1名の教員がチューターの役割を持って、学習をファシリテートする必要性を確認した。

テュートリアル形式の教育方法に関するチューターの準備としては、小人数グループワークやテュートリアル教育、PBLなどの参考図書⁶⁾や参考文献^{7) - 9)}による個人学習を行った。さらに、テュートリアル式教育方法の経験をもつ教員がグループワーク展開に向けてのチューターの関わり方について補足した。

②事例作成

できる限り日常的に遭遇する事例を想定し、時間経過および時間経過に伴う変化を学生が具体的にイメージできるシナリオを設定した。事例については表3に、演習スケジュールについては表4-①にその一部を示した。

③学習支援体制

学生の効果的な学習を支援するために小人数グループワークの開始前に助産診断技術学Ⅱにおける少人数グループワークの位置づけおよび教員の役割（学生の自主的な小グループ学習を支援する）について教員ミーティングを行い確

認した。

さらに、平成15年度は授業の前後に30分から1時間（2回目以降は授業当日の評価と授業前の打ち合わせを兼ねる）、平成16年度は30分程度の教員ミーティングを行った。教員ミーティングでは「学習のねらいと時間配分の確認」、「進度の調整」、「事例展開および事例の理解に関する教員の個人差の是正」、「学生の学習状況の確認」、「グループダイナミクスの確認および調整」、「学生による授業評価の共有」を行った。教員ミーティングにおける演習展開上の調整内容や課題については後述する。

④少人数グループワークの展開

助産科目選択学生12名を4名ずつ3グループに分け、平成15年度は少人数グループワーク合計8回のうち、第1回から3回目までグループメンバーおよび担当教員を固定し第3回目に各グループワーク内容の発表を行った。第4回目以降は学生のグループメンバーおよび担当教員を再編成した。これは主として学生のグループダイナミクスへの配慮であった。平成16年度は各グループワーク内容を発表する頃からグループダイナミクスがよくなってきたので、グループメンバー、教員ともに再編成は行わなかった。平成15年度は単位認定者2名と助手2名（1グループは単位認定者と助手がペアで担当）が各グループを担当し、平成16年度は助手3名がそれぞれ1グループを担当し単位認定者はスーパーバイザーを兼ねて、少人数グループワークにも関わった。

少人数グループワークにおける事例演習の進め方は表4-②、表4-③にその一部を示した。なお、事例演習を進める上では必要に応じて、入院場面や分娩場面における教員同士、教員と学生によるロールプレイング、分娩介助ファントーム、骨盤模型、3Dコンピュータグラフィックスによる周産期診断・分娩介助教育システム¹⁰⁾などを活用した。

⑤授業評価

授業評価からみた学生の反応

学生には成績には影響しないこと、授業内容改善のためにファカルティ・ディベロップメントの研修や紀要、学外の雑誌などに公表する可能性があることを説明した上で、無記名の授業評価を毎回の授業終了後に記述してもらった。授

表3 事例(平成16年度分 一部掲載)

予定日	2004年 4月20日(火)
年齢 血型	32歳 O型 Rh(D)+
既往歴 体格 職業	3歳 TOF根治術 160cm 48kg 事務職員(企画課)
家族背景	父 高血圧 DM(内服) 母 パーキンソン病(内服)
妊娠・分娩歴	19歳 21歳 人工妊娠中絶 25歳 結婚 半年後に離婚(ドメスティックバイオレンスのため) 30歳 再婚 自然流産 31歳 2002年1月 38週 男児 2820g Ap 8/9 促進分娩 出血量 1000ml 児:光線療法2日間
パートナー	35歳 B型 Rh(D)+ 職業 会社員(職場のリストラによる人手不足で残業が多い)
今回の妊娠経過	初診時週数 6週1日 感染症なし 初期 悪阻にて8週1日から9週5日まで入院 点滴治療 <8週1日 血液検査> STS - TPHA - HbsAg - HCV - HIV - ATLA - 血清風疹ウイルス抗体検査 128倍 RBC 407万/mm ³ Hb 12.4g/dl Hct 35% MCV 85.8 MCHC 30.2 Platelets 23.9万/mm ³ WBC 4500/mm ³ <8週1日 膈分泌物培養検査> Chlamydia trachomatis 2+ クラリスロマイシン(クラリシッド) 400mg 2週間内服 中期 18週4日 胎動初覚 19週0日 中期スクリーニング WNL 胎盤位置 前壁 中~高位 後期 28週1日 Hb 11.0g/dl MCV 82.0 Hct 33% 子宮収縮+ 頸管長 32mm 塩酸リトドリン(ウテメリン) 3tab 2週間 膈分泌物培養検査 Candida 1+ 硝酸オキシコナゾール(オキナゾール) 膈錠 40週1日 AFI 8 EFBW 3050g 尿中E3 15μg/ml NST reactive 40週1日(4/21) 産徴 定期健診 cc2cm eff.30% st.-2 Wt. 58.5kg

表4-① 演習スケジュール(平成16年度分)

回	月日	時限	展開内容	シナリオ	情報
1	4/13(火)	3	電話対応 ロールプレイ	場面1	
2	4/14(水)	3	入院準備 妊娠期アセスメント		情報A: Profile 情報B: 妊娠経過表 情報C: 外来指導票
3		4	入院時アセスメント	場面2	情報D
4	4/16(金)	2	分娩第1期	場面3, 4	情報E F
5		3	発表・フィードバック		
6		4	移行期 分娩室移室時期	場面5	情報G
7	4/19(月)	1	分娩第2期~2期	場面6	
8		2			
9		3	分娩第2期 産褥初期計画	場面7	情報H: 助産録
10	4/20(火)	1			
11		2	発表・フィードバック		
12	4/21(水)	1	産褥・新生児	場面8	情報I
13		2		場面9	情報J: 新生児経過表
14		3			

表4-② 少人数グループワーク展開方法①

<p>【授業の進め方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月の演習は1人の産婦のモデル事例の展開を通して助産診断実践過程を理解する。 ・グループワークでは、リーダーシップ、メンバーシップを発揮し、相互に貢献しあえるように事前学習の上、出席する。 <p>【グループワーク時のルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が積極的に発言できる雰囲気をお互いが心がける。 ・自分と異なる意見に対して柔軟な態度で臨む。 ・議論を戦わせつつ、お互いの意見を認め合う態度で臨む。 <p>【グループワークの前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループによって進度が異なることもある。適宜、学生間、グループを担当する教員間で情報交換しながら学習目標を達成する。 ・基礎的知識についてはクラスの進行に合わせて小テストを行う。
--

表4-③ 少人数グループワーク展開方法② 教員用手引き（平成16年度分一部掲載）

日程	項目	展開方法および学生に理解して欲しい内容	時間経過・場所
4/14 3限 4限	分娩第1期 陣痛発来の電話 妊娠期 入院受け入れ準備	<p>ロールプレイ（陣痛発来の電話）</p> <p>2人1組でロールプレイ×2回（1回10分まで）</p> <p>交互に評価：2人が実施2人が評価</p> <p>代表1組が全体の前でロールプレイ</p> <p>全員で評価</p> <p>ロールプレイ内容の評価</p> <p>ロールプレイからの気づき</p> <p>電話での確認内容</p> <p>求められる判断：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分娩開始の判断 ・正常or正常からの逸脱可能性、正常からの逸脱 ・入院の必要性 ・入院or自宅での経過観察に際しての適切な援助（説明） <p>入院までに行う助産診断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妊娠期のアセスメント 分娩に影響を及ぼす妊娠期の健康状態 胎児の健康状態に影響を及ぼす妊娠期の経過 ・分娩経過の予測 <p>妊娠期のアセスメントと分娩経過の予測に基づく入院受け入れ準備</p>	<p>B302</p> <p>各グループ</p> <p>代表1組 (13:45～)</p> <p>全員で議論</p> <p>4限目 各グループ</p> <p>15:40には実習室へ移動</p>

業評価の視点は「授業で理解できた点」、「授業にどのように取り組んだか」、「授業でどのような技術が身についたか」、「教員の関わりでよかった点」、「教員の関わりで改善して欲しい

点」、「授業に対する意見・感想」である。授業日ごとに得られた授業評価を一覧表とし、類似する内容を要約して表5にその一部を示した。

学生は小グループワークの学習を始めた当初は、積極的に発言すると同時に他者の意見も聞こうとするという主体性が見られた。一方、慣れていない学習方法であることから、「知識があいまいで発言できない」など、消極的な側面もみられる。しかし、グループワークのたびに、チューターから考えるヒントを提示される経験、「自分たちが議論に行き詰るまで放っておいてくれる」という、学習者の主体性が尊重される経験を通して、納得するまで話しあうことができるようになり、事前の自己学習が必要であるという認識が高まっていた。さらに、少人数グループワークの後半になると、「授業で理解できた点」に対する回答として、思考プロセスの理解や、診断プロセスにおける総合的な

授業への取り組み方には、積極的な批判的思考や主体的な学習態度がより明確に表現されるようになっていた。

⑥教員からみた少人数グループワークの評価

担当教員からみた学生の反応と授業評価と少人数グループワーク展開上の調整事項や問題点については、授業の事前事後のミーティングで報告および議論した。担当教員からは、担当グループのダイナミクスや学生の学習スピードの個人差、知識の量や知識活用の程度、個人差の大きいグループやチューターとしての関わり方について戸惑いや疑問が出された。

特に1回目、2回目のグループワークでは、事例の理解度や事例から学んでほしい内容についての教員間の差、グループダイナミクスや学

表5 授業評価からみた学生の反応 (平成16年度分より一部掲載)

評価項目	1回目	3回目	6回目
理解できた点	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的知識 ・情報収集の原理原則 ・知識統合・関連性 	<ul style="list-style-type: none"> ・思考プロセス ・全体像の捉え方 ・ケアの個別性 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎知識 ・判断・診断プロセス ・分娩期のケアの概念 ・ケアの個別性 ・現実の分娩場面のイメージ
取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・知識の活用 ・議論の資源となる ・積極的に考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の自己学習 ・学びの共有 ・納得するまで議論 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の自己学習 ・積極的な批判的思考 ・積極的な発言 ・積極的に考える
身についた技術	<ul style="list-style-type: none"> ・助産の基礎技術 ・思考プロセス 	<ul style="list-style-type: none"> ・助産の基礎技術 ・診断実践過程の展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の活用 ・統合力 ・思考プロセス
教員の関わり (よい点)	<ul style="list-style-type: none"> ・考えるためのヒント ・考えるきっかけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・考えるヒント ・解っていないことに気づく導き ・学生の自律性の尊重 ・助産師としてのロールモデル 	<ul style="list-style-type: none"> ・考えるヒント ・視野の拡大 ・ロールモデル ・不足している点への指導 ・ほめる
教員の関わり (改善点)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネガティブなフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しいヒント 	
意見・感想	<ul style="list-style-type: none"> ・考えが共有できた ・知識が曖昧で発言できない ・グループ間で関係ができておらず発言しにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい ・自分たちに足りないことの確認をしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・頭をよく使った ・フィードバックされたものの整理 ・グループワークは大変

この見方の重要性などが上がっている。また、

生の知識量の差が課題となった。ミーティング

では、できる限り事例の理解度やケアの方向性について、コンセンサスを得るようにした。このことは、講義形式以上に教員間で助産教育に必要な教育内容を確認することにつながったと考えている。さらに、教員同士が互いの教育観に刺激を受ける機会にもなったと考える。また、今後の教育内容精選に向けた議論のよい契機となった。

平成16年度は学習内容の具体的調整に加えて、スーパーバイザーの役割を取る教員への関わり方の要望なども出てくるようになってきた。チュートリアル教育においては、原則としてグループワーク展開中に他の教員がグループに介入することはない。短期間の演習であるため、チューター以外の教員の介入が必要な場合もあるが、その介入は慎重に行う必要がある。これは今後の検討課題である。

今後の課題

少人数グループワークを取り入れた結果、学生は少人数グループワークの回を重ねる毎に積極的に思考し議論するなど、主体的学習態度が身についたと実感しているようである。また、グループワーク展開中は、助産過程展開のプロセスの理解が深まる、他者の意見や発想に刺激されて主体的に学習する意欲が高まるなど、一定の効果があると考えている。

一方、基礎的知識の定着については、学生による個人差が大きい。教員側の課題については、事例作成や教員ミーティングは時間的制約が大きいことに加えて、教員のかかわり方の個人差を是正しきれないことは否めない。チュートリアル教育のよさは、出てきた疑問や課題を徹底的に調べて、自ら学習を深めていくところにある。したがって、短い期間の中で、課題が山積し、十分に消化しきれないまま次の課題が出てくることは学生にとっては負担となる。短期間の集中的な授業におけるチュートリアル式教育の是非についても検討が必要である。

今後も学生の主体性や知的好奇心を刺激しながら、助産診断実践能力を高めていくための教育内容を考えて生きたい。

引用文献

- 1) 村本淳子：基礎看護学におけるチュートリアル教育—チュートリアル教育をカリキュラムに取り入れて—, Quality Nursing Vol.3, no.6, 1997
- 2) 小林たつ子：学生の判断能力を高める主体的学習法—Problem-Based Learning—, ナースエデュケーション, 29-35, vol.4.no.1, 2003
- 3) 佐藤直美他：助産課程における診断能力を育む教授方法の試み—小グループによる事例学習を用いて—, 聖路加看護大学紀要, 60-65, No.24, 1998
- 4) 森明子他：新しい教育方法の試み—妊娠期看護のProblem-Based Learning—, 聖路加看護大学紀要, 30-39, No.23, 1997
- 5) 前掲書1)
- 6) 吉岡守正, 東間紘監修：東京女子医科大学チュートリアル教育, 篠原出版, 1996
- 7) 村本淳子：学生のアセスメント能力を高め, 自己学習能力の育成を目指した教育技法第1回チュートリアルの有効性, ナースエデュケーション, 62-66, vol.3,no.1, 2002
- 8) 鈴木玲子：学生のアセスメント能力を高め, 自己学習能力の育成を目指した教育技法第2回チュートリアルの実際, ナースエデュケーション, 90-95, vol.3,no.2, 2002
- 9) 岡本恵理：学生のアセスメント能力を高め, 自己学習能力の育成を目指した教育技法第3回チュータの役割, ナースエデュケーション, 76-81, vol.3,no.3, 2002
- 10) 3次元CG周産期診断・分娩介助教育システム, メディカ出版, 2003

参考文献

- ・看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標,看護学教育の在り方に関する検討会報告書, 平成16年3月26日